



生徒の多様性を排除しないのが攻玉社。だから私のような地味で目立たない存在でも伸び伸びと過ごすことができた。

1994（平成6）年卒業 弁護士

飯野 毅一さん

1976年東京生まれ。1988年攻玉社中学校に入学。1995年東京大学文科Ⅱ類入学。2000年同大学経済学部経済学科卒業。同年大蔵省（当時）入省。2001年財務省大臣官房秘書課係長。2002年フランス・パリ第9大学へ留学。2004年帰国後に財務省主計局調査課係長となるが、2005年、退職。2006年慶應義塾大学法科大学院入学。2009年卒業。2011年に司法試験に合格し司法研修所に入所。2012年卒業。同年、緒方法律事務所に入所し、現在に至る。

——攻玉社での6年間はどんな学校生活でしたか

私を含めて良くも悪くものんびりしている人が多かったような気がします。男子校の特性かもしれませんね。私が在学していたころはちょうど進学校に舵を切ろうとしていた時代で、勉強に関しては厳しい先生が多かった気がします。1年生のときにたまたま選抜学級に入ったものですから、特に厳しかったのかもしれません。印象に残っている行事といえば耐久歩行大会ですね。当時はなんでこんなことやらせるんだと思いますが、きつい課題を与えられて自分で黙々とそれを達成するということは、いい経験だったと思います。

授業についていえば、理系の先生がとくにレベルの高い授業をしてくださっていたと記憶しています。理科系の授業では高度な内容を話してくださったので、自分も興味を持って勉強していた気がします。出来は悪かったのですが、高2から文系と理系に分かれたのですが、進路が決められず、理系か文系か相当悩みました。攻玉社のいいところは、真剣に相談すれば先生はいつも親身に対応してくれたことです。「理系はあとで嫌になると辛いよ、決まらないのだったら文系に行ったらどうか」といったアドバイスを受けて、結果的に文系を選択しました。

——大学受験では志望したすべての大学に落ちたそうですね

中1、2は“かり勉”で勉強したのですが、中だるみに陥って高1のときにクラスで最低の成績を取り、自分でもびびりました。高3のときの三者面談で担任の先生に志望の大学名を伝え、絶対に無理だと断言されましたが、それを無視してそのまま受験し、全部落ちました。でも、自分の行きたい大学を受けなきゃ（笑）。

浪人となって予備校に通いました。予備校は大学受験に特化した勉強をするきわめて実践的な場所ですが、中高時代の授業というのは必ずしもそういうわけじゃなくて、教養的なことも教わります。話題が豊富な先生もいらして、受験には直接役立たないけれども、そこで聞いたことが気になって自分でも本を読んでみたり……そういうことが堆積していたのだと思います。そんな下地の上に予備校での実践的な勉強が足されて、あるとき目覚めたというか、伸びた気がします。結果的に東大の文科Ⅱ類に合格しました。

攻玉社ではクラスの隅っこにいて、きわめて地味で目立った能力もない人間だった私が東大に入れたことで、自分の中では中高生活の総決算ができたという喜びがありましたね。

——大学卒業後もなかなか多彩な経歴をお持ちですね

卒業後は大蔵省（当時）に入りました。配属された大臣官房秘書課は省の人事を扱う職場でした。省内に留学制度があり、ヨーロッパの経済を学ぶ目的でフランスへ留学しました。2年弱をフランスで過ごしましたが、言葉が全然マスターできず大学の講義もよくわからないままに帰国。税金を使って成果もないまま戻ってきてしまったので、帰国後に留学費用は返還しました。

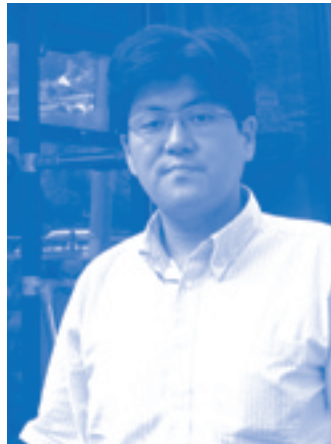
帰国後は中長期的な財政再建プログラムを策定する部署である主計局調査課に配属となりました。興味深い仕事ではありましたが、まったく新しいことに挑戦したくなって、29歳で退職を決意しました。

退職後、慶應のロースクールで法律を学び始めると、これが意外と面白くなり、3回目の司法試験でなんとか合格。首の皮一枚でつながったというか、運に恵まれました。

緒方法律事務所に勤めて6年目。まだまだルーキーの域を出ていないので、緒方弁護士のもとであらゆる仕事をこなしながら実力を養っていきたいと思います。今はとても楽しく仕事ができおり、ありがたく思っています。

——最後に受験生や保護者の方へメッセージを

攻玉社には「質実剛健」の校訓のとおり、気どったり自分をよく見せようとして飾ることを嫌う気風がありました。素朴であっても、それを良しとする気風といいましょうか。先生方も気どらない人が多かったと思います。また、生徒の多様性を認めてくれる学校なので、自分の個性を損なわずに伸ばしていけます。ひとりで悶々と苦しんでいた思春期でしたが、そういう私のような人間が棲息していても排除しない良さがありません。そこが男子校としての攻玉社の良さだと思います。



攻玉社は生徒の思いや個性に十分応え、「好き」を大切にしてくれる学び舎。

1994（平成6）年卒業 東京都市大学都市生活学部・大学院環境情報学研究科准教授、博士（政策・メディア）

西山 敏樹さん

1976年東京生まれ。1988年攻玉社中学校入学。1994年慶應義塾大学総合政策学部入学。2003年同大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了。博士（政策・メディア）学位取得。2005年より同大学院特別研究専任講師。2012年に同大学院システムデザイン・マネジメント研究科特任准教授・同大学医学部特任准教授。2015年より現職。国土交通省所管の一般財団法人地域開発研究所客員研究員兼務。都市生活におけるユニヴァーサルデザインとエコデザインの融合をテーマに実践的に研究。路線バスの電動化やユニヴァーサルデザイン化の研究を推進する当該分野の数少ない国際的研究者。次世代の公共交通に関しては、地方自治体やバス会社へのアドバイザーとしても多数活躍している。関連する著作も多い。

私は幼い頃から乗り物が好きでした。特に、身近な移動手段である路線バスに強い関心を抱き、攻玉社中学校に入学した頃から今まで、バスの雑誌等に路線バスの可能性について調査結果と共に記事を多数寄稿してきました。

その成果の積み上げに基づき、さらに大学でバスのユニヴァーサルデザイン化の研究を望み、日本初のAO入試システムを作った慶應義塾大学総合政策学部合格・進学しました。

今でこそ当たり前のAO入試ですが、当時は社会で注目された画期的な入試システムでした。それまでのユニークな積み上げを、さらに大学で伸ばし、社会貢献に繋げられるかどうかをじっくり書類と長い面接で評価されるわけです。当時の担任の先生には国語を専門とする立場でアピール書類のご指導を繰り返していただきました。また、ほかの先

生方にもいろいろと応援していただきました。私の「バスが好き」という気持ちを大事にしてくれたことが何よりも嬉しかったです。それはライフワークのひとつとなり、そのまま大学院博士課程まで追究を絶えず繰り返し、博士学位を取得して、現在は大学教員を務めています。

最近では、ユニヴァーサルデザイン及び環境低負荷なエコデザインが融合した電動バスや電動一人乗り自動車等の研究開発をしています。まさしく中学時代のテーマを30年間追い続けている攻玉社OBでも変わり種中の変わり種です。

私は「好きなこと」にこだわり、それを貫いてきました。攻玉社はそうした生徒の思いや個性に十分応えてくれる素晴らしい校風を持つ学校です。3年前に母校で講演した時もその空気は健在でした。その度量の広さと温かさが攻玉社の最大の魅力だと思います。

攻玉社で培った協調性や根気が、今に繋がっている。

2006（平成18）年卒業 東京慈恵会医科大学 小児科学講座

古河 賢太郎さん

1987年東京生まれ、2000年攻玉社中学入学。2007年東京慈恵会医科大学医学部医学科入学、2013年卒業。2013年国保旭中央病院にて初期研修医。2015年東京慈恵会医科大学小児科学講座入局。現在は小児科後期研修医として日々研鑽を積んでいる。



攻玉社時代の一番の思い出は部活動です。小学校2年から始めたバスケットボールを攻玉社でも続けました。顧問の先生のもと、中高共にバスケットボール部の主将を務め、チームプレーの大切さを学ぶことができました。厳しい練習を乗り越え、勝利を目指して仲間と戦った日々は今でも一生の宝物で、高校3年の最後の夏の大会までやり遂げた達成感自信につながりました。行事では耐久歩行大会（当時高校は33km）で学年10位以内の入賞を目指して頑張っていましたし、何ごとにも果敢にチャレンジしていたような気がします。

実際の医療現場でも医師のほかに看護師、薬剤師、検査技師など様々な職種の医療スタッフが働いています。異なる職種の医療スタッフが目的と情報を共有し、業務を分担しながら互いに連携し合い、患者さんの状況に的確に対応した医療を提供する、チー

ム医療が求められます。また日々の勉強はもちろんですが、命を預かる医師には、患者さんに寄り添い、ハードワークにもへこたれない根気が必要とされます。こうした協調性や根気は攻玉社での6年間で培うことができ、現在に繋がっています。

クラスメートとも仲が良く、卒業後10年たった今でも担任の先生を交えて定期的にクラス会を開いています。多方面で活躍しているクラスメートの話を聞けるのは嬉しいですし、頑張ろうと励みになります。

中高生のうちに、何でも良いですが「勉強以外に」何か一つのことに打ち込んでほしいと思います。目標に向かって取り組んでいくことの大切さ、大変さを学ぶことはとても大事です。これから入学される皆さんにはぜひともそうした経験をしていただきたいですし、攻玉社には環境が整っていると信じています。